



TITLE:

人間の尊厳と人間の生命(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

西野, 基継

CITATION:

西野, 基継. 人間の尊厳と人間の生命. 京都大学, 2017, 博士(法学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13079>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（法学）	氏名	西野 基継
論文題目	人間の尊厳と人間の生命		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、「人間の尊厳」と「人間の生命」の意味と両者の交錯した関係について、ドイツ連邦共和国基本法が定めるこれら二つの法概念の意味と関係をめぐる法哲学や憲法学での長年にわたる議論を主たる素材として、ドイツにおいてこれまでに何が解明されたかを明らかにし、残された課題を確認しようとするものである。</p> <p>序章では、全体主義体制の克服の文脈で重視されてきた人間の尊厳が、生命医療倫理上の諸問題に対応するなかで新たな問題に直面していることが指摘された上で、基本法に取り入れられて法概念となった人間の尊厳が、どのような意味や構造をもち、何をもたらしたか等の本論文の基本的問題設定がなされる。</p> <p>第1章「人間の尊厳の法的地位」では、人間の尊厳の基本構想として、理性的能力を持つ人格、具体的な現実の人間、人間の自己表現、コミュニケーションの各々に定位した尊厳の理解が挙げられた上で、人間の尊厳の消極的概念規定であるG. デューリッヒの「客体定式」に対し、この概念の内容を積極的な仕方と定義しようとするいくつかの見解が整理され、さらに、人間の尊厳は客観的規範か主観的権利か、人間の尊厳は後続する他の基本権とどのような関係に立つか、といった問題について学説の状況が確認される。</p> <p>第2章「人間の生命の法的意味」では、有機体的システムとしての生命とフィシスとプシュケーの統一としての生命という二つの理解が対比されたのちに、基本法が保障する「生命に対する権利」について、法教義学的な観点から、生命保護の範囲を広く理解すべきこと、この権利が防御権および国家の保護義務規範の両方の側面を持つこと等が確認される。</p> <p>第3章「人間の尊厳と人間の生命の関係」では、連邦憲法裁判所のいわゆる第一次・第二次堕胎判決において、胎児に不可侵の人間の尊厳が帰せられながらも、法的効果の面で広く胎児の生命権の侵害が認められたことが指摘された上で、こうしたジレンマを解消するための考え方として、他の価値・利益との衡量を許さないとされる「人間の尊厳」（基本法1条1項）と法律の留保付きの「生命に対する権利」（同2条2項）とを切り離し、堕胎規制を後者だけに関連付けるものと、両者を結合したうえで、生命権についても人間の尊厳による段階的保護が妥当すると説く見解とが挙げられる。</p> <p>第4章「人間の尊厳と人間の生命の保護範囲—胚の法的地位—」では、胚が基本権主体（または、一部の見解にあつては、国家の保護客体）という意味での法的地位を獲得するのを、受精、胚の個体化、胚の子宮への着床、胚における脳の形成の各時点であるとみる見解の各々と、人は出生後に法的地位を獲得するのであつて、胚には法的地位を認められないとする見解とが詳細な検討に付され、各立場の背後にある人間の尊厳と生命権の保護範囲についての考え方が相互比較される。英米流の功利主義哲学に与し、人間の尊厳に排斥的な姿勢を貫く点でドイツでは特異な立場に立つ法哲学</p>			

者N. ヘルスターの見解も、補論としてここで検討される。

第5章「生殖医学の進歩と人間の尊厳・人間の生命の保護（1）」では、近年の新たな医療技術・医療研究のうち、着床前診断（PID）、消費的胚研究（すなわち、余剰胚からの胚性幹細胞の獲得）、および遺伝子治療が取り上げられ、各々についての賛否両論が、その論拠として背後にある人間の尊厳および生命権の保護についての見解の違いに応じてさらに区分けされ、細かく検討される。

第6章「生殖医学の進歩と人間の尊厳・人間の生命の保護（2）―クローン―」では、クローン技術の内容とその利用可能性が説明されたのち、人クローンの禁止に賛成する論拠として、神の御業の侵害、安全性に関する懸念などと並び、クローン技術により生まれる子が被る心理的損害や、個人としての人間の尊厳の侵害、類としての人間の尊厳の侵害等が詳細に検討される。とりわけ、人間の尊厳との関連では、人のクローニングが個人の尊厳を侵害するものでない場合には、その禁止の論拠として、遺伝的偶然性の確保をその内実とする類としての人間の尊厳が重要になるが、しかしそれも、具体的な尊厳主体をもたないタブーの擁護に堕する危険性があると指摘される。

末尾の「回顧と展望」では、人間の尊厳が、人格の尊厳、個人の尊厳、生命の尊厳、類の尊厳の4種の概念に区別された上で、本論文で検討されたことがそれぞれの尊厳概念との関係で整理される。そして、人間の尊厳の衡量不可侵性をめぐる議論については、人間の尊厳は個別の基本権を超えた次元のものであるとともに、他の基本権の中に具体化するものと捉えるべきであること、人間の尊厳と人間の生命の関連については、生命から経験的に尊厳を根拠づけるのではなく、実践的生活者の態度において自己または他人との交渉の中で生命を看取する方向への転換が必要であること、などが説かれる。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、生殖医療や再生医療などの医療技術の発達に伴って人間の生命への技術の介入の機会と可能性が著しく増大している今日の状況において問題となる、「人間の尊厳」および「人間の生命」の意味と両者の間の交錯した関係について、ドイツ基本法が定める両概念をめぐる法哲学や憲法学の長年にわたる検討を主たる素材に、ドイツにおけるこれまでの議論の成果と今後の課題を確認しようとするものである。

本論文の第一の学術的意義は、人間の尊厳および人間の生命の意味と両者の関係に関するドイツの法哲学者や憲法学者の見解を、多岐にわたる論点の各々に即して丹念に整理し、比較・検討して、今日に至るまでの議論の全体像を示している点にある。その際、本論文の考察の射程は、人間の尊厳および人間の生命それぞれについての基本構想や意味内容、人間の尊厳の法的地位、他の価値・利益との衡量を許さないとされる「人間の尊厳」(基本法1条1項)と法律の留保付きの「生命に対する権利」(同2条2項)の関係、人間の尊厳とそれに後続するその他の基本権の関係など実に広範囲に及んでおり、こうした複雑な議論の全貌を俯瞰する上で、本論文は有益な見取り図を与えてくれる。

さらに本論文の第二の学術的意義は、着床前診断、余剰胚からの胚性幹細胞の獲得、人クローンなどの新たな医療技術の実施の是非をめぐる議論のなかで、人間の尊厳の不可侵と人間の生命権の保護の意味と保護範囲が各論者によりどのように把握され、またどのような仕方で各自の見解の根拠とされているかを、きわめて緻密に分析し、さらにそのことを通じて、生命倫理上の問題に取り組むドイツの法学者たちの思考においていわば前理解として存在する、人間の尊厳と人間の生命の意味と関係に関するさまざまな了解のあり方を明らかにしている点にある。本論文の検討の素材は、基本法の規定に関する学説が大半を占めるが、それにもかかわらず、本論文が解釈論を超えて法哲学的な意義をもつのは、本論文のこうしたアプローチの仕方によると言える。

本論文には、個々の論者の見解についての検討が全体の文脈からみて必要以上に細部に入り込んでいっているように思われる箇所がある上に、やや翻訳調の生硬な表現が論文内容の理解を妨げている部分が見られるが、しかしそのことは、人間の尊厳の不可侵と生命権の保護という重要な課題についてのドイツの数多くの論者を見解を緻密に比較・検討し、ドイツにおける議論の到達点を示した本論文の学術的意義をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士(法学)の学位を授与するに相応しいものと認められる。また、平成29年2月3日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。